

[原著論文]

大学体育における教育課程に関する研究 (第Ⅱ報)
—とくにコンテンポラリースポーツの新たな試みについて—

高橋一栄、佐藤勝弘、西原康行

キーワード：大学教養体育、モダンスポーツ、コンテンポラリースポーツ、教育課程、カラーセラピー

Curriculum of University Physical Education for Students of Health and Welfare
—Especially new curriculum, Modern Sports to Contemporary Sports—

Kazuei Takahashi¹⁾, Katuhiro Sato¹⁾, M.P.E., Yasuyuki Nishihara¹⁾, M.P.E.

Abstract

University physical education, especially that involved in general education programs, is facing its crisis these days. Among wide variety of factors of the problems, disregard for ordinary lessons such as ①an easy introduction of season sports and ②a change from sports to do to sports to see is considered to be one of the largest factors. We believe that the task of university physical education is to condense what students experienced at primary school, middle school and senior school and provide them with chances to experience more enjoyment of exercising. For that purpose, we need to have students to understand the attractiveness of "contemporary sports" (for understanding oneself and others and experience the greatness of nature) not only to deal with "modern sports" (mainly competitive). In this way, We have tried curriculum for three years. As for the student's feeling of Physical Education have gradually changed. Negative opinions to Physical Education decreased and they comprehend new feeling of Physical Education. Depends on the color-therapy, the negative colors decreased and affirmative colors increased.

Key words: university physical education, modern sports, contemporary sports, curriculum, color therapy

要旨

大学体育、とくに大学教養体育は危機の時代を迎えている。その原因は多岐に渡っているが、①安易なシーズン・スポーツの導入、②Do SportsからSee Sportsへなど、平常の授業を軽視した取り組みが大きな原因となっている。大学体育は、小、中、高等学校までの体育を総合して、より一層運動の楽しさを体感させることが大切であ

る。そのためには、これまで行われてきた「モダンスポーツ」(競い合いを中心としたスポーツ)だけでなく、「コンテンポラリースポーツ」(自分自身や仲間を知り、自然を中心としたスポーツ)の魅力も体感させることが大切である。このような考え方で、本学体育教育課程を3年間実施した結果、学生の体育授業に対する意識が大きく変容した。体育に対する否定的な意見が減少し、

高橋一栄 新潟医療福祉大学 医療技術学部 健康栄養学科

[連絡先] 〒950-3198 新潟市島見町1398番地
TEL: 025-257-4435
E-mail: kazue-t@nuhw.ac.jp

新しいスポーツ教材の魅力を体感するものが増加した。その変化をカラーで把握する手法によると、否定的カラーが減少し、肯定的カラーが増加した。

I 緒言 (目的)

近代スポーツ (以下モダンスポーツという) は、1800年代前半よりイギリスを中心に発達したものである。多木浩二は、近代スポーツを表現するにあたり、ベルナル・ジレを取り上げ、「その多くは貴族の余暇や祝祭性を持ちながら、人に競り勝つ特性を中心に発展してきた。」¹⁾と述べている。それは現在においても、4年に一度開催される近代オリンピックに継承されてきているのである。

モダンスポーツは、現在もわが国の小学校・中学校・高等学校等の体育授業で中心的に扱われてきている。具体的には既成のルールにのっとったサッカー、バスケットボール、バレーボール、陸上競技等に代表されるように、すべて競い合いが中心となっている。確かに、競い合いは本質的に人を夢中にさせる要素をもっているが、そこには両刃の剣としての危険性もあり、これまで競い合いが過ぎるあまり体育嫌いになる場合も見受けられた。

本研究における試みは、モダンスポーツに、コンテンポラリースポーツを加えるものである。具体的内容として、一つめはメルロ・ポンティに代表される主観的身体と客観的身体、すなわち、自らの身体を客観的に捉えるまなざしの豊かな経験 (身体運動) が、他者の身体を自らの身体と同じ感覚で捉えることにより、他者の痛みを把握し、いたわる気持ちが生まれることを大切にしたいという言説、鷲田清一の「何か少年や少女の事件が起こるたびに、心のケアや心の教育がどうのといった声があがるが、私はすぐにはそういう発想は取れない。(中

略) 何か、身体が憶えた智恵や想像力、身体で学んだ判断を信じたいのだ。」²⁾という言説、また、西原の、スポーツ科学における現象学的パラダイムの重要性を指摘した「身体化するモノ」³⁾の言説から、自らの身体への気づきと関心が自らの身体への配慮を生み出し、それが他者の身体への気づきと関心を生み出し、さらに、他者の身体への配慮すなわち、心の目で他者と触れ合う感覚を生み出すという現象学的パラダイムによる視点を取り入れていこうということである。

二つめは、機械化・能率化をめざしてきた20世紀における近代社会が、いつのまにか欠落させてきたものとして、人と自然とのかかわりに着目し、人も自然の一部であるという気づきを促し、自然と共生する中で、自分自身を深く見つめることにより、周りの仲間や環境を大切にする気持ちを育てたいと考えている⁴⁾。

そこで本研究では、教育課程にモダンスポーツに加えてコンテンポラリースポーツを取り入れることにより、本学学生のこれまでの体育に対する意識がどのように変化するか、さらに、どのような資質を育成することができるかについて、継続的に研究することを目的としている。

II 研究内容

本研究では、1 基本的な教育課程をどのように構想するか、2 具体的にどのような教材を配置するかを主な研究内容としている。

1 基本的な教育課程の構想

モダンスポーツに加え、コンテンポラリースポーツを取り入れることを意図し、次の3点を、本学体育の基本的な構想として位置づける。

1) 典型的な教材をもとに、小・中・高等学校までの学び方を再確認する活動を通し

て運動とのかかわり方を理解し、生涯続けることのできるスポーツを身につける。

- 2) 「ストレッチング」や「フィジカル・フィットネス」を体験することにより、自分自身の心と身体の気づきを通して、周りの人やものへの思いやりの心を育てる。
- 3) 自然とふれあう活動を体感することを通して、四季の微妙な変化や自然の移り変わりなどを察知する鋭敏な感性を養い、自然や人と共生する力を育てる。

本学体育では、これら三つを融合することが、すわちコンテンプラリースポーツ教育にアプローチすると考えている。

2 教材の開発とその配置

1) 典型的な教材の開発

平成13年開学時、前期授業オリエンテーションにおいて、1年次全学生322名に、小学校・中学校・高等学校までの運動経験調査（24項目）を実施した。その調査によると、これまでの運動経験で最も多かったものにバレーボールがあげられた。（97.8%が履修済）本学の体育施設の実態及びこれまでの経験を考慮して、バレーボールを典型教材として取り上げることとした。そのコートやルールも、チャンピオンスポーツに固執せず、6面あるバドミントンコートを利用し、3対3の人数によりだれでもボールに触れることができるようルールにも工夫を加えた⁴⁾。ボールも最初からオフィシャルなものを使わず、ソフトバレーボールを使用しゲームの高まりに応じてボールを変えるなど、だれもが楽しめるよう配慮した⁵⁾。

2) その他の教材の配置とその意図

1学年前期で、ソフトバレーボールにより、運動とのかかわり方を再確認し、後期では、その力を活用して、グループで、また、個人で、それ以外の運動とかかわり、生涯続けることのできるスポー

ツを獲得させたいと考えた。体育施設と教員の定数から、屋内施設では、バドミントン、テーブルテニス、屋外施設では、テニス、サッカー、ゴルフから選択させ、後期前半7時間で一つのスポーツを、後半7時間で他のスポーツを経験させるよう意図している。

2年次、「スポーツ実践Ⅰ・Ⅱ」では、障害者や高齢者が気軽にできるニュースポーツ、ソフトバドミントンを典型的な教材として前半の8時間に位置付け、主体的な学習の仕方をさらに洗練させ、後半の7時間はフライングディスクを経験し、その教材化を目指している。

3年次「スポーツ支援Ⅰ・Ⅱ」では、さらにその幅を広げ、障害者や高齢者が中心になって行なうスポーツ、チェア・バスケットボールやチェア・ハンドボール及び視覚障害者のスポーツであるブラインド・サッカー、ブラインド・テーブルテニスの体験等新たな教材の開発を考えた。

3) ストレッチング及びフィジカルフィットネス

自分自身の身体の気づき、そして他人への配慮を考えると、ストレッチング及びフィジカル・フィットネスは教材としてとくに大切である。この二つについては、授業前半では教師が中心になって、基本的な行ない方、機器の使い方等を身に付けさせ、徐々に自分でできるように意図している。この二つについては、1年から3年までの授業すべてに位置づけ、少しずつ日常化ができるよう配慮している。

4) 自然とふれあう活動の設定

本学体育の最も根幹をなす、自然体験活動については、1年次及び2年次に位置づけ、少しずつ自然とふれあう機会を増やしていこうと考えている。（3年次は長期にわたる学外実習等のため除外）

1 年前期後半の授業で、大学内外の自然の中で、体育テキストとして使用している『センス・オブ・ワンダー』（レイチェル・カーソン）の輪読を行い、自然を深く見つめさせようと意図している。この輪読を基に、レポートを作成させ、レイチェルの自然に対する考え方について、自分の経験と反映させて理解を深めさせようと考えている。

1 年後期では、集中授業として、「尾瀬トレッキング」または「スキー実習」（各 2 泊

3 日）を設定し、2 年集中授業では、近隣公的施設において河川及び海でのカヌーを経験させ、さらに自然とのかかわりを深くさせようとしている。本学における教養体育の全体構想は表 1 に示すとおりである。

3) 授業における教師の姿勢と指導の意図

小学校、中学校、高等学校における学習の進め方をベースに、自主的・主体的な学習を成立させることが大切だと考える。その資質が、生涯に渡って運動に親しみ、今

表 1 新潟医療福祉大学教養体育の教育課程

名 称	1 年次 (前期必修・後期選択) スポーツ・健康 I・II	2 年次 (必修) スポーツ実践 I・II	3 年次 (必修) スポーツ支援 I・II
目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中・高校の学び方の確認 ・典型的な教材による運動へのアプローチ、フィットネス、ストレッチング 	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースポーツ典型教材による運動へのアプローチ ・ニュースポーツ（フライングディスク）教材化 ・種目選択による自主的学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・チェアバスケット、チェアサッカー、ブラインドスポーツなどの学習 ・チェアスポーツの教材化 ・ブラインドスポーツの教材化
学 習 内 容	<div>ストレッチング</div> <div>フィジカルフィットネス</div> <div>3 人制ソフトバレーボール</div> <div>ネット型スポーツ (バドミントン・テニス)</div> <div>フィールド型スポーツ (ゴルフ・サッカー)</div>	<div>ストレッチング</div> <div>フィジカルフィットネス</div> <div>ニュースポーツ 1・2 (ソフトバド・フライングディスクなど)</div>	<div>ストレッチング</div> <div>フィジカルフィットネス</div> <div>ニュースポーツ 3・4 (チェアバスケット・チェアサッカーなど)</div>
実 習	<div>トレッキング・スキー実習（1 年）</div> <div>カヌー実習（2 年）</div>		

後対象とする障害者や高齢者の運動生活をクリエイトすることにつながる。このような考え方から、教師は次のような姿勢で授業を構築していく。

- 1) 学習者を前面に出し、教師は円滑な学習をサポートする支援者としての立場をとる
- 2) ストレッチング、フィジカルフィットネスなど、初めて経験する内容については、その基礎や基本を確実に教え、定着を図る
- 3) 運動を苦手としている学生にも、運動の楽しさやおもしろさを十分体験させるため、ルールを工夫し授業中にアドバイスや激励などの助言を積極的に行う。
- 4) 学習評価については、日常における積極的な活動への取り組みの姿勢を重視し、運動の得意不得意だけで評価を行わないことを、授業開始時に理解させる。
- 5) 各時間終了後、授業に関するアンケートを実施し、授業改善や修正に努める

Ⅲ 研究方法

1 基本的な姿勢

これまで教育現場での研究は、「理論に実践を当てはめる」いわゆる「Theory into Practice」という考え方が主流であった。しかし、新しい教育研究の動向が、「実践の中にこそ理論がある」という考え方、すなわち「Theory in Practice」へと大きく変わりつつある。⁶⁾ 筆者らは、「大学教師も、臨床の場に有って、研究者であるばかりでなく教える人であり、ともに学ぶ人である」という立場で、日常の授業をまず大切にしつつ、その授業を理論化していこうという考えに立ち授業実践を行ってきた。

2 色による意識の把握

本研究において、体育授業の分析にあたっては「カラーセラピー」の手法を用いることにした。⁷⁾ 「カラーセラピー」によると、色彩学における色の分類は二つに分けられ

る。一つは有彩色であり、もう一つは無彩色である。有彩色は、「色味をもつ」全ての色であり、無彩色は、「色味をもたない」色である。有彩色は、赤、青、緑などが上げられ、無彩色は、黒、白、灰、などがあげられる。

さらに色は、互いに独立してもっている三つの属性があり、これを「色の三属性」と呼んでいる。すなわち「色相」「明度」「彩度」の三属性であり、色相は、「色味」を表し、「明度」は明るさの度合いを表し、「彩度」は鮮やかさの度合いを表す。

有彩色や無彩色及び色の基本的三属性をまとめると下の表のようになる。

表2 色の基本的性質

	色 相	明 度	彩 度
有彩色	○	○	○
無彩色	×	○	×

有彩色の中には色相、明度、彩度があり、無彩色には、明度のみが存在する。

「カラー・セラピー」における人間の心理と色との関係を見ると、「有彩色は肯定的な心理が強く働き」、「無彩色は、否定的な心理が強く働く」と定義づけている。

これらの事実及び表出された色の背景となる記述の内容から、本学における体育授業については、「有彩色（赤、青、緑など）は、体育授業を肯定的にとらえている色」とし、「無彩色（黒、灰など）は、体育授業を否定的にとらえている色」とした。また有彩色の中で、とくに明度の低い色、たとえば「茶」「黄土」「紫」「群青」は、その記述内容が全て否定的であったことから、無彩色と同じ範疇に入れることにした。あわせて有彩色の中に肯定・否定の意見がある色が存在することから、それらを中間に位置付けることとした。なお、表3の下線部の色は、有彩色で否定、または否定と肯定の意味を表している。色の違いによって授

表3 肯定・否定色基準

肯定 否定 の 色	色 の 種 類
肯定 的 な 色 (有彩色)	水、黄緑、緑、深緑、黄、 桃、橙、赤、銀、金、虹
肯定・否定色 (下線は有彩色)	青
否定的な色(無彩色、 下線は有彩色)	黒、白、灰、茶、 <u>黄土</u> 、紫、 群青

業に対する肯定・否定の傾向を把握しようと考えた。また、「カラーセラピー」によると有彩色の中で、暖色、寒色の違いによって肯定度に違いがみられるという報告から、表4を作成し、その内容についても考察を加えることにした。

表4 暖色・寒色による肯定度の違い

	色 の 例	肯定の度合い
暖 色	黄、桃、橙、赤	強 い 肯定
寒 色	水	中程度の肯定

3 対象者

新潟医療福祉大学3学年抽出学生 90名

4 調査項目

1) 体育授業の色モデルによる比較

①小学校、中学校、高等学校までの色モデルとその理由

②本学授業終了後の色モデルとその理由

1年前期、1年後期、2年、3年

○色彩基準をもとに①黒から②③無色まで具体的に色を提示し、小・中・高校までの色については、「最も印象に残る授業」を、本学では「授業終了時」の色をその理由とともに記述させた

2) 本学授業の充実度について

授業終了時に、充実度を1から100%まで、数値で記入させ、その理由も自由記述させた

3) 教材の有用性について

3人制ソフトバレーボール、ソフトバドミントン、ストレッチング、フィジカ

ルフिटネス、トレッキング実習、スキー実習、カヌー実習、チェアスポーツ、ブラインドスポーツ

*有効と考える教材について、その理由も含め複数選択させ、記述させた

4) 教師の姿勢について

- ①授業における支援を中心の働きかけ
- ②受容的、安定感のある学生への対応
- ③主体的学習のための手立ての有効性など

5 調査期日

平成15年12月20日～23日

(3学年授業終了時回収率100%)

IV 結果

1 体育授業履修後の色の変化(全課程)

小学校、中学校、高等学校までと本学体育授業履修後の色の変化を次頁図1に示す。

小学校・中学校・高等学校までの体育に比べ、本学の体育を経験すると、無彩色が減少し、有彩色が増加することが視覚的にとらえられる。とくに、黒、灰などの色が減少し、有彩色の中でも明るい色が次第に増加してきている。本学3学年の体育経験後では、無彩色はゼロになり、有彩色、とくに明度の高い色が増加してきている。

2) 本学体育経験後の無彩色の変化

小学校・中学校・高等学校までの体育を象徴的に無彩色、すなわち黒や灰色と表現したものが17名、複数回答による主な理由(()内は実数)は、①体育授業が強制・命令的であったから(10)②運動の得意なものだけが目立っていたから(8)③授業に自由度が感じられなかったから(7)④運動や走るのが苦手だったから(7)⑤競争や競い合いばかりだったから(4)を示していた。

①と③は相互に関連していると考えられることから、無彩色、すなわち、否定的に

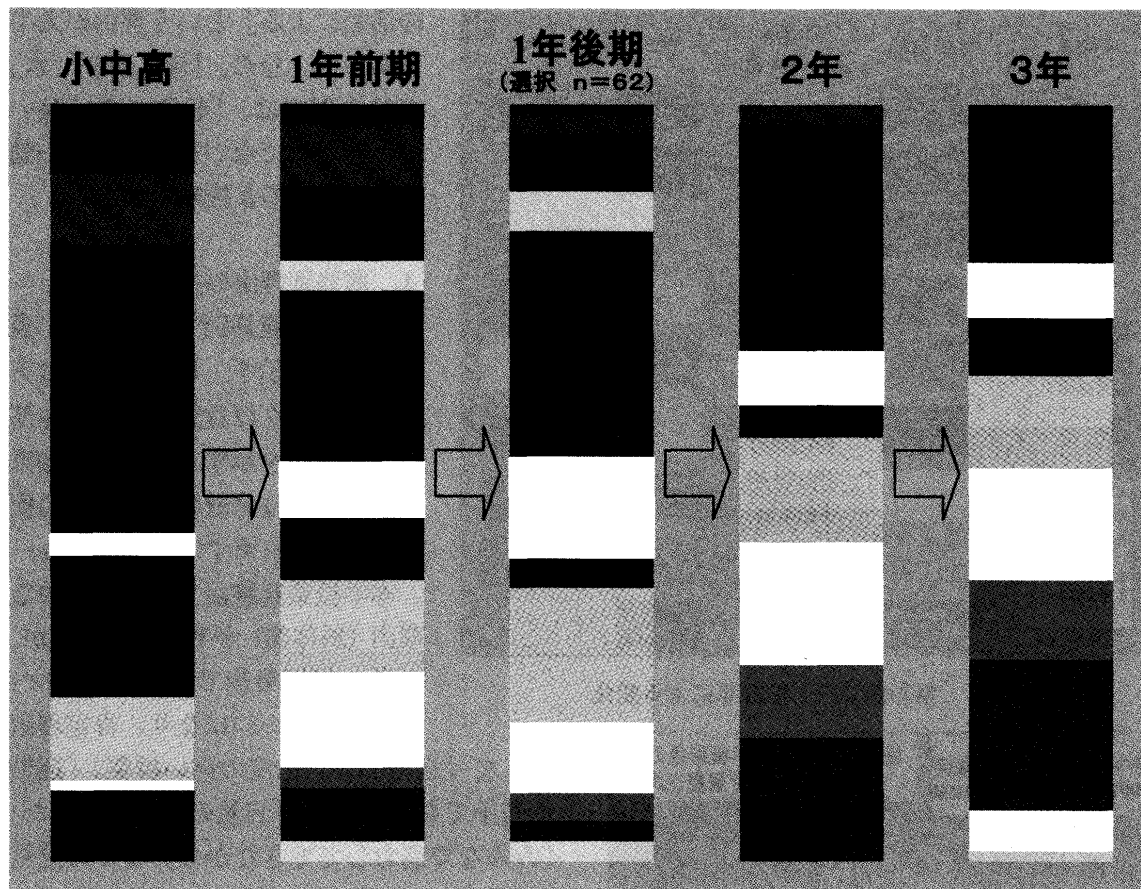


図1 体育授業履修後の色の变化 n=90

体育授業をとらえている多くの学生は、小学校、中学校、高等学校までの体育授業に自由度が少なく、強制、命令的なイメージを持っており、それが色に表出していると

考えられる。

図2は、小・中・高等学校時に「黒」と答えた8名の、本学授業経験後の色の变化を示したものである。この8名は本学体育

1年前期履修後では半数が、黒や灰色と答えていたが、本学体育2年、3年経験後、7名が有彩色に変化した。灰色のままの1名の理由は、「今も運動が嫌いだから」であった。

図3は、「灰」と答えた9名の、本学授業経験後の色の变化を示したものである。「灰」の9名は、本学体育1年経験後、有彩色に変わり、その変化の仕方も、「黒」よりは顕著で3年終了後には、5名が有彩色とくに、暖色に変化した。

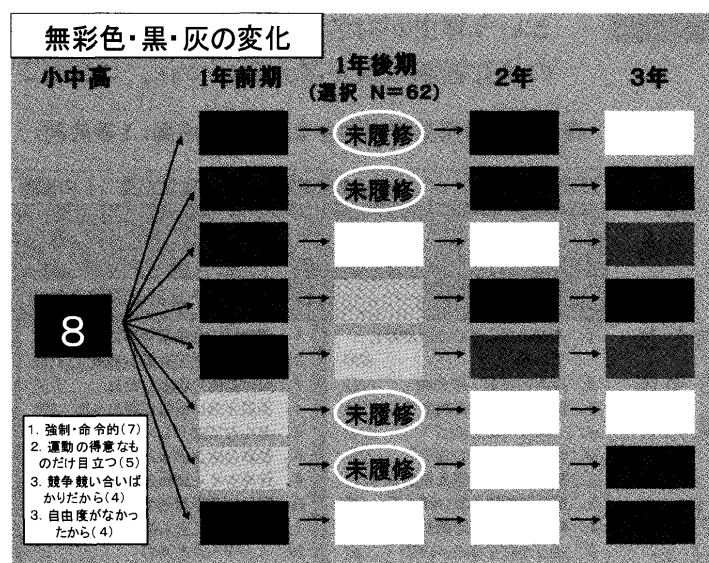


図2 無彩色「黒」の経年による変化

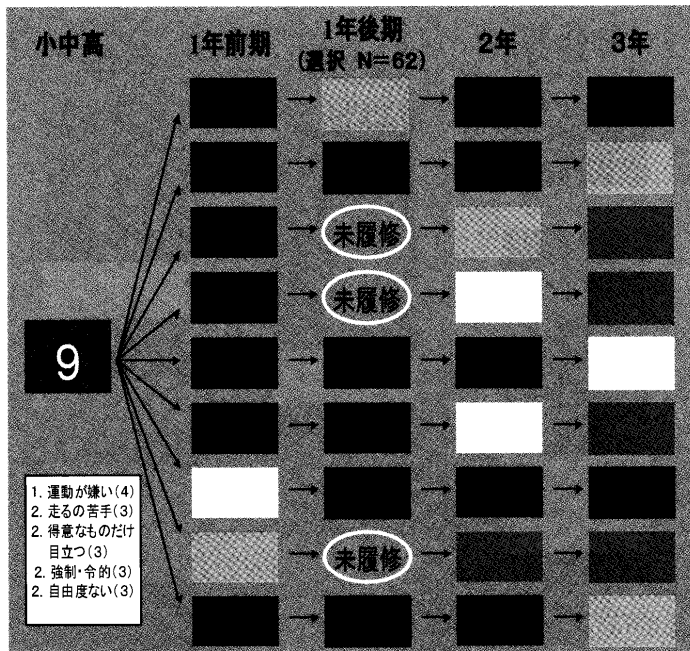


図3 無彩色「灰」の経年による変化

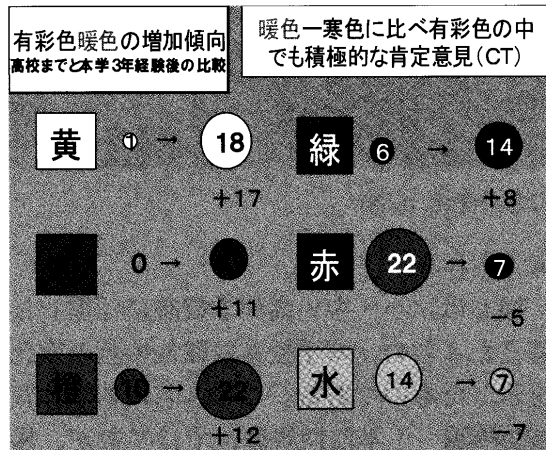


図4 暖色寒色の変化

3 有彩色・暖色の変化

仮説でも示したように、無彩色に比べ有彩色は肯定的な気持ちを出し、さらに有彩色でも、寒色よりは暖色が、特に肯定的な気持ちを強く表出すると言われている。図4は、高校までと本学3年体育終了時における有彩色の暖色の変化を実数で示した。

それによると、「黄」「桃」「橙」はそれぞれ増加傾向を示し、「緑」も増加した。「緑」の増加理由をみると、「自然の中で

の活動による」という理由が大半であった。なお、「赤」及び「水」の減少理由は、「競争」や「競い合い」だけでない本学の体育の魅力によるものと推察される。

4 履修別理由の主な変化

体育授業履修別主な理由を、表5及び6に示す。()内数字は実数、ゴシックは肯定理由、斜体部は否定理由を示す。下線部付加意見は、本学体育教育課程設定の仮説にアプローチする理由である。

本学授業経験前では、否定的な理由(斜体部)が半数を占めるが、本学1年授業後では、「人よりへただから」一つになり、肯定理由

として「自主的で自由度の高い授業」「運動が苦手でも楽しめた」「自然の中で楽しめた」「みんなで協力してできたから」などの意見が増加し、2年では、さらに、「誰でも楽しめる新しい種目(ソフトバドミントン)」「より自然に接近(カヌー)」などが多くなり、3年では「新しい種目(チェアバスケットボール、同ハンドボール、ブラインドサッカー、同ピンポン)の経験が魅力的だった」という理由が84名(実数)に増加し、本学の体育経験年数が増えるにつれ、コンテン

表5 体育授業履修別主な理由(小中高、1年前期)

履修別理由ベスト10 ゴシック部肯定・斜体部否定意見()内実数	
小・中・高	1年前後期
下線部仮説関連理由	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動の得なものだけが目立っていた (19) 2. 授業が強制・命令的 (18) 3. 運動自体が好きだから (15) 4. 人よりへただから (14) 5. 競争や競い合いばかり (14) 6. 競争や試合で燃えたから (12) 7. 夢中で授業に取り組んだ (9) 8. 教室と違い開放感があった (9) 9. 走ったりするのが苦手 (8) 10. 苦しくつらいこと多かった (7) 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自主的で自由度の高い授業 (32) 2. 運動が苦手でも楽しめた (13) 3. 自然の魅力が楽しめた (13) 4. 教室と違い開放感があった (12) 5. みんなで協力してできた (10) 6. 運動自体が好きだから (8) 7. 汗をかくと爽快感があるから (7) 7. 新しい種目が経験できたから (7) 7. 競争しなくとも楽しめたから (7) 10. 人よりへただから (5) 10. 試合や競争で燃えたから (5)

表6 体育授業履修別主な理由（2年、3年）

2年	3年
1. 新しい種目・自然の中の（ソフバド・カヌー）経験が魅力（58）	1. 新しい種目（車椅子、ブラインド）の経験が魅力だった（84）
2. 自主的で自由度の高い授業で充実していた（29）	2. 障害者・高齢者スポーツの魅力に触れることができた（44）
3. 競争や試合で燃えた（13）	3. 授業や用具が工夫されていて楽しかった（23）
3. 教室と違い開放感あった（13）	4. 自主的で自由度高い授業（20）
5. 用具が工夫されていた（11）	5. 競争しなくとも楽しめた（15）
5. 競争しなくとも楽しめた（15）	6. 運動が苦手でも楽しめた（12）
7. 運動自体が好きだから（9）	7. 競争や試合で燃えた（11）
7. 夢中で授業に取り組んだ（9）	8. 夢中で授業に取り組んだ（7）
9. 汗をかくと爽快感がある（7）	9. 開放感がある授業（6）
9. 運動が苦手でも楽しめた（7）	

ポラリースポーツの魅力に多くの学生がふれつつあると推察できる。

5 本学体育履修別充実度の比較

本学体育履修別充実度を、図5に示す。3学年体育と、1年前期、同後期、2年の間に、有意に差が認められた。

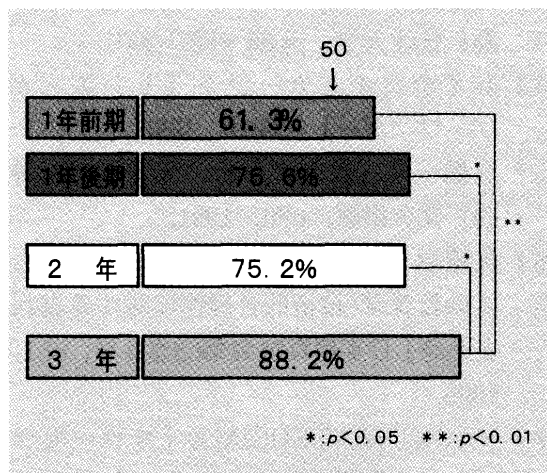


図5 本学体育履修別充実度の比較

V 考察

3年生の授業の一端を図6に示してみる。チェア種目では、最初は平面であるゴールへのシュート（ハンドボール）次第にチェアバスケットボールに移行し（ボール軽量から少しずつ重く・小学生ミニバス、中学生ボール、一般）ルールも簡便なものから少しずつ加えることにより、どの学生もチェアスポーツの魅力を味わえるようになって

きた。

図7ブラインドサッカーでは、視覚障害別にテーピングのアンダーラップテープをゴーグルに張り付けたり、全盲プラス視力のある補助者をチームに組み入れたり、鈴を入れたサッカーボールを自作し、鈴の数や用具の工夫を各グループごとに行うなど創造的に授業が行われ、より一層授業の自由度を高めることにより、充実度が増加したと推察できる。

図8ブラインドピンポンでは、ゴルフ練習ボールを利用し、ボールの中に鈴を入れ（2個～4個）、その数により、転がる距離の違いを体感したり、また、サイドフェンスを自作するなど、工夫が見られた。ゴーグルについても、アンダーラップの枚数により

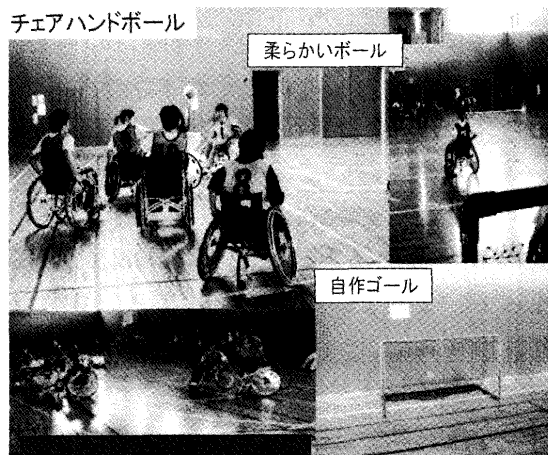


図6 チェア・ボールゲームの展開例



図7 ブラインドサッカー 段階的視覚障害例



図8 ブラインドピンポン教材開発例

見え方の違いを互いに試したり、小さな穴を開け、視野狭窄を体感するなど、学習者自らが教材開発に努めた。

授業における独創的なアイデア、しかもそれは教師から、命令されてやるものではなく、学習者自らが、互いの協力のもと、創造していく力、これこそが本学学生に求められる大切な資質と私たちは考える。

体育授業において多様な経験を積んだ本学の学生は、社会に出て障害を持つ人や、高齢者と関わる時、必ずその人の身になって、よりよい解決策を考えると推察される。

Ⅵ 今後の課題

私たちは「Theory in Practice」、すなわち、「実践の中にこそ、理論が存在する」という考え方に立ち、教育課程の開発を行ってきた。

あわせて、授業の進め方も、小学校から高校までの体育経験を財産ととらえ、教師中心の授業展開ではなく、学習者中心のそれへと変えつつある。

今後さらに追求する課題としては、「実践から理論を導き出すこと」にある。つまりこれまで実践してきた本学の教育課程について、どのように理論化するか、理論を構築することが今後の課題といえる。

*本報告は、平成13年9月27日北海道大学で行われた第52回日本体育学会体育科教育分科会、平成14年10月12日埼玉大学で行われた第53回日本体育学会体育科教育分科会、平成15年9月26日熊本大学で行われた第54回日本体育学会、平成16年9月24日信州大学で行われた第55回日本体育学会で口頭発表した一部をまとめたものである⁸⁻¹¹⁾。

引用

佐藤学他：越境する知1 身体：よみがえる、東京大学出版会、2000。

文献

- 1) 多木浩二「スポーツを考える」ちくま新書 p14, 1995.
- 2) 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』PHP新書, p3, 2000.
- 3) 西原康行『筑波大学研究論文集 第23巻』筑波大学, pp85-88, 2001.
- 4) レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』新潮社, 1996.
- 5) 高橋一栄『教師のための体育学習指導論』文久出版, p70, 1991.
- 6) 佐藤学『教育学研究 実践的探求としての教育学 技術的合理性に対する批判と系譜』日本教育学会第63巻3号, p81, 1996.
- 7) NAOKI MATSUSIMA「カラーセラピー・色彩学のABC URL: <http://www.gulf.or.jp/~naoki/psychotra/> 2002.12.2」1996.
- 8) 日本体育学会第52回大会(北海道大学)『体育科教育学分科会』, p626, 2001.
- 9) 日本体育学会第53回大会(埼玉大学)『体育科教育学分科会』, p607, 2002.
- 10) 日本体育学会第54回大会(熊本大学)『体育科教育学分科会』, p615, 2003.
- 11) 日本体育学会第55回大会(信州大学)『体育科教育分科会』, p638, 2004.